提言

新教育課程のねらいと学習評価（インタビュー要旨）

東京大学名誉教授／帝京大学中学校・高等学校校長補佐／
中央教育審議会教育課程部会副部会長　市川（いちかわ）　伸一（しんいち）

1　学習指導と評価のポイント

今回の学習評価は、学校教育法で示された学力の三要素をほぼ踏襲するような形となりました。ポイントは以下のとおりです。

⑴知識・技能

基礎的・基本的な知識・技能がどれだけ身に付いているかということを評価します。ただし、「理解を伴った知識・技能」であることが前提となるので、ここに注意が必要です。

⑵思考・判断・表現

評価の対象は「与えられた知識を活用した、より高度な知的活動」ということです。例えば、授業での行動や討論、発表の姿などで見ることができるし、テストでも見ることができます。また、レポートやプレゼンテーション等も大事にしてほしいと思います。

⑶主体的に学習に取り組む態度

自らの学習に積極的に取り組み、改善しようとする意思や行動を評価します。これには二つの側面があり、一つは「粘り強い取組を行おうとする側面」です。これは、知識・技能、思考・判断・表現に向かう粘り強い努力で、量的に努力するという側面です。

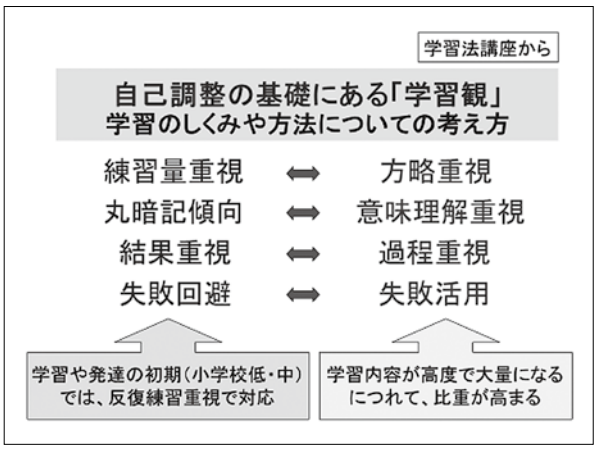
もう一つは、「自らの学習を調整しようとする側面」で、学習プロセスを自ら改善していくという工夫のことです。自分は今どこがわかって、どこがわかっていないのか、自分はこういうことがどうも弱い、といったメタ認知が入ってきます。それをどこで見るかというと、例えば学習計画やワークシートの「ここはよくわかった、ここはどうもわからない」といった記述等です。また、高校等で実施するテスト返却後の反省レポートにおいて、「どんなところで間違えやすいか、どんな勘違いをしていたのか」といったことを自分なりに分析して、「こういうふうに学習改善したい」といった記述ができるとよいと思います。ただし、そのためには教師が「こういうことも評価します」ということをきちんと指導することが大切で、そういう指導を通して、生徒自身が自分の学習を見つめ自分で改善していく、ということを促してほしいわけです。

この「学習の自己調整」は、「学習のPDCAを生徒自身が回すこと」というと、わかりやすいと思います。生徒も、自分の学習を「プラン・ドゥー・チェック・アクション」のように回していこうとしているはずで、そういう力を発達の段階に応じて付けていくということなのです。

2　子供の学習観を変える

私は、「学習法講座」というのを、生徒向けに20年くらいやっています。これは、自分の学習方法を自分自身で見直させるためのものです。「どんな勉強方法をすると効果が上がるのか」という一人一人がもっている「学習観」に働きかけるのです（図参照）。

小学校では、どちらかというと左側が多く、例えば「漢字を○回書きましょう」といった練習量重視でも、低学年だったらなんとかなります。ところが高学年になってくると、漢字の構造や意味といったことも大事になります。他の教科でも、学習内容が高度で大量に



図

なるにつれて、右側のような考え方を入れていかないと、どうにも適応できなくなる。

「勉強をいくらやってもできません」という子は、やはり学習観や学習方略に問題があって、左のような考え方が固まってしまっています。もちろん反復も大事ですが、反復するだけ、粘り強く頑張るだけでなく、少しずつ右のような考え方や、そういう工夫をしていくことが大事で、そこに「自己調整」が入ってくるわけです。ひたすら「粘り強く」だけではなく、学習のレベルが上がるにつれて、より深い学び方を取り入れていく。そういう自覚を生徒自身にももってほしいし、先生も生徒の実態を見ながら、授業の中で「自分のやり方を見直して改善していこう」ということを指導してほしいのです。

こういう発想は教科教育の中ではあまりなく、学習指導要領や教科書といった内容面に着目しがちです。私は、「内容指導」という言葉と、「方略指導」という言葉をよく使っていますが、この「学習観」や「学習方略の指導」といったことは、学習指導要領に直接入っていないわけです。

例えば、学習が進まない子に個別指導する際、何を指導するかというと、普通は「内容指導」になります。「この子は分数が弱いから、分数をしっかり教えよう」といった弱いところ、よくわかってないところを教える、つまり「内容指導」です。これももちろん大事ですが、それだけではなかなか自立した学習者にはなれません。むしろ、「方略指導」として、学習観や学習方略、つまり学習についての考え方ややり方なども、発達の段階に応じて指導していってほしいのです。

3　各学校や先生方に期待したいこと

今回の学習評価の各観点はどういうことを目指しているのかということについて、改めて「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年１月21日）や「学習評価の在り方ハンドブック」（令和元年６月）を見直していただき、どういうことを評価するのか、そのためにどんな方法があるのかといったことを、学校の中で具体的に議論していただきたいと思います。

また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（令和３年３月）に、「学習の進め方」と書いてあります。ここでは、学習計画や、学習の自己診断といった自己評価、それから学習方略などを全部ひっくるめて「学習の進め方」と呼んでいます。学習の自己調整ということを、より平易な表現で具体的に示したものと言えます。このことを大切にし、指導に生かしてほしいと思います。

4　おわりに

予習をして「授業ではもっとこういうことをわかりたい」と思い、授業で「本わかり」をして、復習で定着させる、という「予習→授業→復習」という一連の流れは、教科を問わず「学び方の基本」です。学習者が、自分のPDCAを回すという発想が、これからの指導と評価の大切なポイントだと考えています。